埼玉大学経済学部同窓会

経和会会報

第 3 号
2000年6月14日発行
発行　埼玉大学経済学部同窓会
経和会会長　伊藤　正昭
編集　副会長　中野　恵永
浦和市下大久保255番地
TEL048—858—3281

開学50周年記念式典・祝賀会

―平成11年11月26日―　盛大に開催さる

昭和24年、国立学校設置法により旧制浦和高等学校、埼玉師範学校、埼玉青年師範学校を包括し新制大学として発足した埼玉大学は今年5月に開学50周年を迎えた。

これを記念して、事実上の開学記念月である11月26日、浦和市内に新しくオープンした浦和ロイヤルパインズホテルで記念式典と祝賀会が盛大に開催された。

「記念式典」

11月26日、15時30分、埼大オーケストラ、トランペット奏者達によるファンファーレが高らかに鳴り響き、厳粛な雰囲気のうちに記念式典が挙行された。

先ず兵藤　釗学長から「大学改革の大きなうねりの中で、開学50周年を機に改めて本学の存在意義を確認しつつ、21世紀に向けた新たな埼玉大学を築いていきたい」と式辞が述べられた（2面に全文掲載）。

次いで中曽根弘文文部大臣の祝辞が文部省の佐々木高等教育局長により代読され、地元埼玉県の土屋義彦知事、開学50周年記念事業後援会伊藤正昭会長（経和会会長）と祝辞が続いた。さらに各界から招かれた来賓の紹介、祝電の披露、年間を通じて実施される様々な記念事業の内容紹介などが行われた。

式典のハイライトは「式典序曲」の演奏であった。この日のために教育学部の鈴木静哉助教授が「伝統と未来」をイメージして作曲した荘厳な曲を、フル編成の埼玉大学オーケストラが同学部の竹澤栄祐助教授の指揮で見事に演奏し、出席者に大きな感動を与えた。

戦後間もない頃、北浦和駅前のバラック同然の校舎と常盤町の埼玉師範の木造校舎で呱呱の声をあげた埼玉大学。その赤貧を洗うが如きカレッジライフからは想像だにできなかった学生による大編成の管弦楽団の素晴しい響きが、50年の歳月を象徴しているかのようであった。

「記念祝賀会」

式典終了後、17時から同ホテルで記念祝賀会が開催された。

兵藤学長の挨拶に続いては来賓が次々と祝辞。松永　光衆議員議員（元文部大臣）、佐藤泰三参議院議員、相川宗一浦和市長、吉良　爽理化学研究所副理事長、そして埼玉大の国際交流協定校であるポーランド日本情報工科大学イエジ・パヴェク・ノヴァツキ学長と、多士済済であった。

来賓の方々に大学側から学長と事務局長が加わり、揃いのハッピ姿で賑やかに鏡開き、次いで名誉教授竹内正幸元学長の発声で乾杯し祝賀ムードは大いに盛り上った。

余興として秩父夜祭で演奏される「秩父屋台ばやし」が地元の「だるま会」により勇壮に披露され、宴に花を添えた。

50年の歴史を振り返り、昔を懐かしむ話の輪があちこちにできて、和やかな雰囲気のうちに時を忘れて祝宴が続き、最後に加賀谷教育学部長からお礼の挨拶でお開きとなった。

募金のご協力に感謝

50周年記念事業後援会
会長　伊藤　正昭

昨年は開学五〇周年記念事業にあたり、皆様にご寄付をお願い申し上げましたところ多数の皆様のご協力を頂き、大学教職員並びに卒業生その他から総額約二五四〇万円に上るご寄付を頂きました。

殊に経和会の皆様から頂いたご寄付の総額は全学部同窓会の中でも際立っており、これも経和会の皆様の愛校心と大学の事業に対する関心の深さの賜物と存じ、五〇周年記念事業後援会を代表して厚く御礼申し上げる次第であります。

皆様からのご芳志は事務費を除いて全額大学に寄付し、この寄付金は五〇年史の出版、公開講座の開催を初め、すでにご案内申し上げました記念事業のほか、経和会が五〇周年記念事業の協賛事業として提案しているワンダーフォーゲル部OBが推進している「百年の森」植林事業の一部にも充てることができました。

ところで、今年埼玉大学は大宮ソニックシティにサテライトカレッジを開設したほか、すでにNHKテレビなどでご承知の通り経済科学大学院は東京駅八重洲北口前の「八重洲会館」地下に「東京ステーションカレッジ」を開設しましたが、経和会はこの事業にも寄付し、学長、経済学部長を初め大学当局から感謝されております。

これら経済学部に対する支援ができますのも経和会会員の皆様の終身会費の納入が順調で財政的基盤が確立された成果の一つであります。

更に、今年四月から埼玉大学運営諮問会議が設置され、私が卒業生代表としてその委員の一人に選任されましたが、これも同窓会の中で最も強固な組織を有し、活発な活動をしている経和会の代表を勤めさせていただいていることが理由であると思われますので、経済学部のみならず大学運営についても経和会会員の皆様から積極的にご意見をお寄せ頂き諮問に応えて参りたいと思います。

就きましては、ここに日頃のご協力に感謝申し上げますとともに、今後とも皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げご挨拶と致します。

式典で挨拶する伊藤会長

百年の森づくり

経和会副会長
内藤　勝久

埼玉大学開学50周年記念の協賛事業に指定された「百年の森づくり」に経和会から多額のご寄付をいただき、心より御礼申し上げます。お蔭様で大学校内に活動の拠点となる「百年の森テラス」が完成し、その落成式が去る2月5日、兵藤学長や貝山経和会名誉会長を初め大学教職員幹部、埼玉県農林部林務課長、大滝村長、地元商店会長、ワンゲルOB・現部員ら40名が参加して、盛大に開催されました。

当日の模様はNHK、朝日新聞、毎日新聞によって、またテレビ埼玉では8分間の特別番組で報道され、環境活動に対するマスコミの関心の高さを知ることが出来ました。

この活動は、今から4年前に埼玉大学ワンダーフォーゲル部創部40周年の記念事業として始められたもので、埼玉大学秩父山寮の奥にある白石山の、山火事で焼失した南東斜面に、100年をかけて落葉樹の森を再生しようというものです。現在は作業現場までの道づくりに取り組んでいますが、年内には第1回の植林を計画しています。

落葉樹の森は水を育み荒川に清流を蘇生させるばかりでなく、動植物の健全な生態系を確立し、海の生物資源をも豊かにします。地球の温暖化防止や環境保全に対する啓蒙さらには地元の大滝村の活性化にも繋がります。

このように考えると、この活動は単なる植林という肉体労働に止まらず学術面を包含する、国立大学に相応しい総合プロジェクトであるといえます。そこで新たな規約を定め、ワンゲルから組織を分離し、より大きな運動に耐えうる体制を作ろうと鋭意取り組んでいるところです。役員もほぼ固まりましたので、この秋には第1回のシンポジウムを埼玉大学にて開催し、大きな流れを作りたいと思っています。

名誉会長の兵藤学長は、落成式のご挨拶の中でこの活動を高く評価され「力のある人は力を、お金のある人はお金を」と広く参加を呼びかけてくださいました。これから活動の輪が急激に拡がると財源の確保も大きな仕事となりますので、経和会の皆様のさらなるご支援を切にお願い申し上げます。

開学50周年記念式典式辞

埼玉大学学長　兵藤　釗

本日ここに、埼玉大学開学50周年記念式典を挙行するにあたり、ご来賓の皆様をはじめ多くの方々のご出席を賜り、厚く御礼申し上げます。本学では開設の年の11月3日に開学記念式典を挙行して以来この日を開学記念日に設定してまいりましたので、この11月に50周年の記念式典を執り行うこととした次第であります。

埼玉大学は、1949（昭和24）年5月、第2次大戦直後の教育改革の一環として設立された新制国立大学の一つであり、旧制浦和高等学校、埼玉師範学校、埼玉青年師範学校の3校を母胎として誕生いたしました。ご案内のように、戦後教育改革は、教育の機会均等の実現を理念の一つに掲げ、そのために少なくとも一県に一つは国立大学を設置するという方針の下に進められました。本学は、このような理念の実現をめざす埼玉県内唯一の国立大学として、県民の大きな期待を担って呱々の声をあげたのであります。

しかし、発足当初の本学は、文理学部・教育学部の二つの学部を有するだけで、学生数も4年制課程は1学年400名ということもあり、また、キャンパスも現在の北浦和公園、浦和市役所の所在地にあった従前のものを引き継いだだけで、浦和高等学校が戦災にあったこともあって、設備はとても満足のいく状況ではございませんでした。

その後、1950年代半ば以降の高度経済成長期を迎えて、戦後のベビーブームの煽りをうけて18歳人口が急増し、所得水準の上昇により大学進学率が高まるにつれ、新制大学は、初発の理念を現実のものとすべく、エリート教育の段階からマス教育の段階への移行を迫られることとなりました。

60年代前半、全国的に、いわゆるリベラル・アーツの教育を担ってきた文理学部の改組による大学の拡充がはかられるなかで、埼玉大学においても、文理学部を廃し、教養学部・経済学部・理工学部、それに一般教育を担当する教養部を新設するという改組拡充が行われることとなりました。さらに、70年代半ばには、理工学部が理学部・工学部に分離拡充され、本学は、教養部の上に、既設の教育学部を加えて5学部を擁する総合大学へと発展してまいったわけであります。思い返せば、総合大学化は発足当初から将来構想として掲げられていたものであり、これはいわば悲願の実現とも言えるものであります。

文理学部改組による大学の拡充によって、学生定員も1学年960名と発足時に比し倍増することとなりましたから、この拡充に併せて、より広いキャンパスを求めて総合移転計画が推進され、埼玉大学は浦和市の市街地から現在地、荒川にほど近い郊外の大久保地区に移ることとなりました。

さらにまた、この時期、科学技術の発展にはめざましいものがあり、大学に対しても高度な教育・研究が求められるようになりました。本学におきましても、60年代末から70年代半ばにかけての理工系大学院の開設を先駆けとして大学院設置が進められた結果、現在では文化科学研究科、教育学研究科、経済科学研究科、理工学研究科、政策科学研究科というように、広範な領域において高度な教育と研究が進められるにいたっております。

ここで付言しておきたいことは、理工学研究科においては、和光市という近隣地域に所在する理化学研究所のご協力を得て、わが国初の試みとして連携大学院というかたちで博士課程が設置されたことであります。また、教育学研究科においては、東京学芸大学・千葉大学・横浜国立大学との協力のもとに、東京学芸大学を設置校とする連合大学院方式により博士課程の教育にあたっております。これもまた、兵庫教育大学を設置校とする関西地区の連合大学院と並んでわが国初の試みであり、いわばモデル校としての役割を果たしております。

こうして埼玉大学は、創設以来半世紀にわたる歴史を経る間に着目すべき発展を遂げ、いまや、学部学生の1学年定員は発足当初の4倍を超える1,630名となり、大学院も含めると8,500名になんなんとする学生を抱えるにいたりました。しかも、近年、国際化時代の進展を反映して東アジア、東南アジアを中心に留学生が増え、その数は400名を超えるにいたっております。

このような埼玉大学の展開には多かれ少なかれ新制大学に共通するところがございましょうが、新制大学が開学50周年を迎えようとするいま、日本には再び大学改革の季節が訪れています。

その背景には、1973年秋に訪れたオイルショックを契機として、さしもの高度経済成長も終焉を遂げ、情報化やグローバリゼーションの進展とともに社会・経済の仕組みが大きな変化を遂げつつあること、あるいはまた、戦後世界の枠組みをなしてきた米ソ冷戦体制の終焉とともに、社会の枠組みだけではなく、人びとの精神のスタンスにも変化が生じてきたということがあろうかと思います。

そしてまた、この間、大学そのものをめぐる状況にも大きな変化が現れてきました。とりわけ注目すべきは、90年代に入る頃より、18歳人口の減少が進行するなかで再び大学進学率が上昇しはじめ、いまや、同世代の若者の二人に一人が大学に行くというユニバーサル・アクセスの段階を迎えているということであります。大学の大衆化時代の到来であります。

その結果、大学に学ぶ学生諸君の学力の幅が広がっただけでなく、価値関心も個別化・多様化しつつあります。さらにまた、長い受験競争のなかで偏差値を基準とした志望校選択が習い性と化し、チャレンジ精神が失われていくという問題もあります。大学は、昔から、教えられたことを覚えるのではなく、自ら課題を発見し解のありかを探る仕方を学ぶ場であると言われてきましたが、大学の大衆化時代のなかで、こうした大学の使命を果たしていくためには、大学における教育のあり方の再検討が求められていると思います。

それだけではありません。前述のような社会の変化のなかで、このところ、実務に携わる人びとや主婦・高年者などのなかに、自らをリフレッシュしたいという欲求を抱く人が増え、生涯教育に対するニーズが高まってまいりました。さらにまた、企業や自治体などのなかにも、大学の知的能力を活用したいというニーズが強まってきております。

こういう変化もまた、大学の改革を迫っています。かつて大学は「象牙の塔」と呼ばれ、大学人にも「象牙の塔」に閉じこもって研究に精を出しておれば良しとする趣がありましたが、いまや、いかにして社会に開かれた大学を構築していくかということに思いをいたし、社会に対するアカウンタビリティを果たしていかなければならないところにきていると思います。これは、その財源の多くを国民に負う国立大学にとってはゆるがせにできない課題であると存じます。

こうしていま、大学には「知性の府」の再構築が問われていますが、国立大学を取り巻く環境には厳しいものがあります。とりわけ、行財政改革の進展とともに急浮上してきた独立行政法人化問題は、その帰趨如何によっては「知性の府」の再構築を脅かしかねない問題を含んでおります。

大学はいかなる設置形態を取るのが望ましいかということについては、いろいろな立論が可能でありましょうが、どのような設置形態をとるにせよ、大学というもの、あるいは、教育と研究という仕事に関しては、その仕事に携わる者の自由な発想を大事にし、それを長い目で守り育てていくという視点が不可欠であろうと存じます。仮にも、短期的な視野に立って、効率や有用性だけを基準として事を処理するとすれば、国家百年の計を誤ることになるのではないかと怖れます。文部省当局、国会議員の皆様をはじめ関係の方々の深いご理解を賜りますよう衷心よりお願いする次第であります。

私どもは、このような大学改革の大きなうねりの中において、開学50周年を機に、改めて本学の存在意義を確認しつつ、21世紀に向けた新たな埼玉大学を築きあげていきたいと考えております。本日ご列席の皆様におかれましては、引き続き温かいご支援とご協力を本学に対し賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

以上をもって開学50周年記念式典にあたっての式辞といたします。

▼埼玉大学50年のあゆみ

埼玉大学は昭和24年5月31日、旧制浦和高校、埼玉師範学校、埼玉青年師範学校を母体として、文理学部及び教育学部の2学部からなる新制大学として発足。同時に、全国に新制国立大学69校が設置。

昭和24年	11月	開学記念式典挙行
25年	3月	埼玉大学浦和高等学校廃止
26年	3月	埼玉大学埼玉師範学校及び埼玉大学埼玉青年師範学校廃止
28年	3月	第1回卒業式挙行
	5月	本部が北浦和地区に移転
29年	3月	経済短期大学部設置
38年	4月	工学部設置
39年	7月	工学部が大久保地区に移転
40年	4月	文理学部改組。教養学部、経済学部、理工学部及び教養部設置。工学部廃止
41年	12月	本部管理棟（大久保地区）竣工
42年	3月	事務局、学生部が新管理棟（大久保地区）へ移転
	7月	大久保地区正門の落成式挙行
44年	11月	附属図書館、経済短期大学部、教養部が大久保地区へ移転
	12月	経済学部、教養学部が大久保地区へ移転（埼玉大学の移転統合完了）
46年	4月	保健管理センター及び教育学部附属地球科学観測実験室設置
47年	3月	文理学部廃止
	7月	悠元寮が大久保地区へ移転
48年	4月	行動科学情報解析センター設置
	9月	大学院工学研究科設置
49年	4月	理工学部附属地盤水理実験施設設置
50年	3月	埼玉大学宿泊施設（ときわ荘）竣工
51年	5月	理学部及び工学部設置
52年	4月	大学院文化科学研究科及び大学院政策科学研究科設置
53年	4月	大学院理学研究科設置
55年	3月	経済学部、附属図書館、政策科学系合同棟竣工
	4月	分析センター設置
59年	3月	理工学部廃止
	9月	国際交流会館竣工
60年	1月	情報処理センター・分析センター竣工
	11月	政策科学研究科棟竣工
61年	4月	教育実践研究指導センター設置
62年	2月	大学会館竣工
63年	11月	国際交流会館（2号棟）竣工
平成元年	4月	大学院理工学研究科（博士前期課程、博士後期課程）設置
2年	3月	教育専攻科廃止
	4月	大学院教育学研究科設置
3年	3月	理学研究科廃止
	4月	総合情報処理センター設置
	9月	工学研究科廃止
4年	10月	経済短期大学部が経済学部に合併。夜間主コース設置（学生の受入れは平成5年度から）
5年	4月	大学院経済科学研究科設置
6年	6月	地域共同研究センター設置。政策科学教育研究機関（仮称）創設準備室設置
7年	3月	国際交流会館3号館竣工
	3月	教養部廃止
8年	3月	地域共同研究センター棟竣工
	4月	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）に構成大学として参画
	12月	経済学部新棟竣工
9年	3月	経済短期大学部廃止
	4月	留学生センター設置
	9月	行動科学情報解析センター廃止。政策科学教育研究機関（仮称）創設準備室廃止。政策科学研究科廃止（学生の受入は平成11年度まで）
11年	11月	開学50周年記念式典挙行

経和会終身会費について

会長　伊藤　正昭

平成十一年度から、会員の皆様に終身会費の納入をお願い申し上げましたところ、多数の皆様からご入金頂き、ご協力下さいましたことを心から御礼申し上げます。

お陰をもちまして経和会の財政は安定し、大学側からの資金面の要請にもある程度応じられるようになりました。

皆様のご協力によりできました貴重な資金は慎重に管理し、有効に活用するよう役員一同気を引き締めて対処して参ります。

昨年の会報発行後、何人かの会員の方から、会費納入者の氏名を会報に掲載すべきであるとのご意見を頂きましたので、ご協力に対する感謝と、ご入金の確認の意味も含めて、今回から会費納入者のお名前を掲載させて頂くことにいたしました。

なお、ご都合で、終身会費二万円を納入しておられない方はぜひ早い機会にご入金下さるよう併せてお願い申し上げます。

経和会はようやく軌道に乗ったとは申せ、常設の事務局があるわけではなく、役員のボランティア精神に頼っているのが現状であり、事務局を常設して管理・運営に万全を期すためにはまだ資金的余裕はございません。

また、大学としても生き残りをかけて様々な活動を展開しており、そのためには同窓会の物心両面における支援が必要であるとして、経和会にますます大きな期待がかけられております。

何卒現状をご理解頂き、会費未納の方は終身会費二万円の納入にご協力賜りますよう、重ねてお願い申し上げる次第でございます。

なお、分割の方は納入完了時に名簿リストに掲載いたします。

終身会費納入の方々（敬称略）

平成十一年度入金分

新入会員

平9年入学安藤知彦、金澤明子、姜孝枝、倉本玲子、後藤美貴、佐藤和亨、鈴木大祐、髙橋朋子、西村大輔、三品剛彦、宗形大介、山内孝哲、吉田恭子、和田洋二郎、**平10年入学**相田智子、相場佑子、青井孝憲、青木洋高、秋野宏和、秋山浩一、秋山紗恵子、阿久津達也、朝日佳奈子、足立慎太郎、安部香織、綾野みどり、新井宏法、新井淑子、荒川正樹、栗野由美、飯田和行、飯田博子、飯塚崇光、五十嵐智子、石澤孝洋、磯貝恭輔、市川充成、市川良介、市村直子、伊藤彰二、伊藤大志、伊藤貴文、伊藤拓生、伊藤百合子、井戸順治、井上香奈、井上淳、今井聡、入佐智子、入澤崇仁、岩井俊郎、岩崎智之、岩本英和、印田麻利、上田美穂、上野公之、上野博行、宇治野修、薄井淳子、内村俊亮、内山大輔、内山鉄也、王承洪、大江愛、大江雄高、大川健一郎、大角和久、大滝学、大前輝明、岡部解、尾形淳子、奥村仁美、尾崎泰正、小野田唯思、小幡啓二、影山紘美、風間里子、片桐佐紀、片山伸也、葛山浩邦、加藤晶子、加藤真二、加藤幸江、加藤義博、金子友香、鹿野裕美子、嘉戸温子、上赤誠、上川大明、苅部いずみ、狩谷貴嗣、河合麻里子、川口章、川口浩司、川口弘介、川口勇気、川原弥生、河辺明子、神田貴弘、菅野慎也、菊池由恵、北澤千弘、北爪政成、木村暁、工藤貴之、久野和哉、久保田聡、黒川敦、小池ななえ、小池寛子、小泉綾子、小泉寛子、古賀浩正、小澤昌寛、古滝晋也、小西洋平、小林大祐、小林浩美、小林正晃、小林雅史、小林真弓、小林幸寛、小谷中充、昆哲也、後藤詩子、西園寺太郎、斎藤圭司、齋藤健太郎、齋藤孝典、斉藤由美子、齋藤陽子、酒井和人、坂田泰一、坂本太郎、佐木江理加、櫻井義則、櫻庭壮文、定方玲子、佐藤茂、佐藤高宏、佐藤仁泰、佐藤知行、佐藤大樹、佐藤学、佐藤美咲、佐藤喜行、沢田知子、宍戸藍、篠原寛幸、柴田圭、柴田昌廣、島田智香、嶋田正敏、島根幸子、清水喬之、清水裕行、下村朋之、謝川寧、沙味友子、志良以友子、末柄由美子、末松由紀子、須黒澄人、須郷優介、鈴木健一、鈴木順子、鈴木孝洋、鈴木雅人、鈴木香恵、鈴木領規、関口貴啓、瀬下智子、瀬志本綾子、高井麻衣子、高久尚子、高久良太、高田樹、髙橋郁美、瀧山徹、竹入正治、竹野陽子、田島充、田島佳明、立谷恵、田中正太、田中誠二、田中智博、田畑泰、田淵智子、田宮耕平、代阪真吾、千田貴誉成、茅根孝浩、千羽秀平、辻永、土田匡人、角田彩、坪田大輝、津和野友、寺坂涼、寺田雄大、戸田顕正、冨岡峰雄、鳥山啓孝、中井聡、中島みどり、中野進、中村淳一、中村勇一、中村幸弘、中本陽一郎、中谷裕志、永井志朗、長尾匠、長嶺史子、那須野寛顕、楷木麻衣子、成見彩、西坂紀輝、西田卓郎、西田文憂、楡井誠、根本考理、能見悟史、野上和宏、野口仁、野田真人、花田智香、花ノ木拓真、日野幸弘、平墳奈津子、平野千春、平松繕、深澤大樹、福田純一、福本善洋、福山耕平、袋井幹文、藤崎章央、藤田一成、藤田淳也、太中俊介、古川裕之、堀克昭、堀淳子、堀江香純、本田希美、牧雄哉、牧瀬知之、牧田康史、桝谷史紀、松崎真、松永百代、松永有美子、松原麻季、儘田哲雄、丸山好太、三浦道成、水谷昇平、水野時枝、三田悠一郎、峯田智恵美、宮川由美子、元木正幸、本白水健光、森川真悟、森下康弘、八重樫拓弥、矢崎正毅、屋代ちひろ、柳澤誠治、柳原寛明、山岡絵里奈、山形好人、山越健志、山田祐治、山本明子、山本高、山本智之、行松あきみ、吉岡純子、吉川由里子、吉島宣義、吉田明央、吉田昭子、吉田圭子、若松智之、渡邊浩介、渡辺史朗、渡辺潤、渡邊真由、**平11年入学**相場隆幸、阿久津有紀、油谷啓之、阿部輝伸、阿部智則、阿部朋之、天野友幸、荒川正孝、飯塚敏洋、飯野圭一、池田耕二、池田由紀、石井香弥子、石川敏彦、伊地知涼子、磯部未来、井田幸徳、市川恵、一條淳、市場啓伸、井手縁、伊藤日郎、伊藤冬海、伊藤正夫、伊藤雄馬、井村哲也、岩内拓磨、宇塚梓、江川亮、江口さは子、尾池美幸、大内祐作、大内礼子、大熊恵理、大島佳恵、太田直樹、大貫嘉久、大野順子、岡部泉、岡部陽一、岡部陽平、小形基一、小川覚、小川智之、小川恵、奥村祐子、小澤周、小田桐奈津子、柿沼拓水、郭琳、影山智史、笠倉絵理、春日宏介、片岡明子、香月わかな、加藤健、加藤智子、加藤成美、加藤浩之、金田修一、神永直也、亀井大和、狩野陽子、川田大、川西達也、河村達彦、木賀直美、菊地智史、菊地直樹、菊地央、岸久美子、北まなみ、北島伸吾、北野晋也、岐部晋一郎、木村あずさ、木村香織、桐澤麻理子、楠野紋子、朽木優子、國安裕司、熊倉真知子、黒崎康夫、桒原悠介、賢持英明、小池愛子、鴻池正志、古賀真人、小久保宏美、小暮淳、小林伸一郎、小林伸輔、小針奈津美、後藤隆寛、後藤範充、齊藤和江、齋藤景子、斉藤浩介、斉藤拓朗、斎藤典子、斎藤美由紀、斉藤裕子、齋藤礼子、酒井里美、坂井美幸、坂本直哉、佐々木顕、佐々木拓允、佐々木良継、佐藤一博、佐藤茂太、佐藤啓幸、佐藤洋一、実沢初恵、澤村功、椎名貴之、塩沢智子、鴫原友則、柴崎智行、志村麻子、下川智子、下田昌弘、首藤陽介、白井健一、白井靖子、親泊恵怜、神部舞、菅井慶彦、菅原瑞恵、杉浦景子、杉谷俊輔、杉本直憲、鈴木加奈、鈴木仁、鈴木朋憲、鈴木佳美、須田明子、諏訪智英、関奈津子、関口徹、関口紘一、関根彩乃、薛俊、善治博司、素波千春、高崎成章、高田江津也、高田季実子、高野良介、高橋昇悟、髙橋寛、高松徹、高森大祐、滝澤純一、竹井弓子、竹川光一、田崎慎二、舘佐知英、田中誠一、田中美希、田辺経、田邊健一、谷川洋、田村悦子、田村和久、田村崇、田村悠策、筑後昌英、帖佐沙織、塚本博昭、堤伸平、寺田眞廣、寺田恵美、天間久恵、出牛直樹、徳光晃、戸高成二、飛田純一、戸辺良一、外山亮一、豊嶋佑也、中尾智恵、中里光夫、中野真、中村節子、中山文枝、長崎正浩、長沢聡子、長島恭彦、並木淳一郎、南里英二、西浦真太郎、西岡詠美、錦織大介、西野寛史、西原良江、根岸哲平、野口豪、野口隆志、野澤友美、橋口耕太、橋本聡、橋本紀子、羽田敬一、濱岡晃司、原和範、原ひろみ、原北斗、原田裕章、針ケ谷由美、旭泉剛、廣瀬晃、廣瀬由貴、笛木哲史、福原綾、藤木祐二、藤原千夏、星純人、堀内祥、本間考、前田亮、牧田滋夫、牧田浩典、増田太郎、松岡広大、松崎幸浩、松本和也、丸山暁彦、三浦剛、御子柴泰彦、三田文美、皆川恵美、宮阪佳代子、宮坂一、宮崎総子、宮沢桂、宮澤雄一郎、宮田葉子、三好礼子、武藤沙織、村越亜希子、村山淳史、元村純哉、百田有希、森田京平、森本淳史、矢島秀樹、山岡三記、山口祐樹、山崎貴弘、山崎千枝、山田英申、山根隆治、山本志保、山本みのり、湯澤由美、横尾兼司、芳川麻由子、吉竹夏子、吉田康平、吉田大佑、吉田教充、吉橋紀衣、米持友紀、李克置、若色和典、脇かすみ、渡部景子、渡部真理、渡邊悠樹、和田祥子、**平11年（院）入学**賀剣良、嶋田浩、杉山広孝、鈴木勇、李永銘、

卒業生

昭28年卒加美山毅、鈴木善助、鈴木寧、橋本好三、原田義雄、深瀬和巳、町田博次、吉田瑞男、**昭29年卒**岩井和雄、岩佐毅、小熊貫一、木戸睦雄、小林秀次、齋藤弘、佐藤浩、関根幹夫、田中充穂、仲佐秀雄、**昭30年卒**秋元康孝、伊藤正昭、小木曽嵩、小磯博昭、佐藤光治、嶋倉宏、早舩良雄、藤岡光彦、船津昭、北條宗男、吉田元士、若井浩、**昭31年卒**鎌倉孝夫、清水利雄、角田迪夫、西久保嘉男、横倉千穂、和田寅彦、**昭32年卒**久保勝茂、栗原一郎、永嶋勇作、福田満、松井弘、松本孝敏、山川弘、**昭33年卒**新井富美男、井上豊、大江理雄、久保田健也、小山隆明、櫻田良彦、田口隆、丹下博之、長島伸和、野間滋、古田正一、宮本昌幸、和田實、**昭34年卒**後出義明、磯崎昇、碓井良明、大江喜四郎、小澤篤、柁谷勉、亀山巌、菅野和夫、久保信朗、小林健二、角川信義、中野惠永、西野信、林矩子、日高準一、渡辺正勝、**昭35年卒**五十嵐千児郎、太田雅久、大野和美、大野節子、熊埜御堂範雄、鴻野秀夫、多比羅順一、俵克己、蔦川正義、土屋實雄、堀部政男、村上啓二、村崎剛史、康本徳守、山中朔徳、**昭36年卒**相川茂、五十嵐清人、大谷洋生、海保和司、葛西眞言、小林一博、高田普通、塚本清、戸村澄夫、直江忠、早川弘文、**昭37年卒**秋山晃一、河野昭一、小林尚茂、田中正迪、富田不二雄、松葉恒雄、矢口隆、**昭38年卒**芦野洋雄、池田典義、小澤清之、海保俊雄、小林忠雄、小林洋史、今野耕作、島津進、鈴木毅、関衛、田口紘一、内藤勝久、成子俊生、増子典男、矢筈野武久、山村秀樹、吉村洋、渡邊龍雄、**昭39年卒**飯島辰夫、石原健二、井上昭夫、岩城昌一、鎌倉一郎、佐藤迪、鈴木芳典、中島範男、日置雄、松原尚明、**昭40年卒**黒須宣男、鈴木利和、**昭41年卒**加村トク江、小林敏雄、小間富蔵、馬場弘文、吉村泰賢、**昭42年卒**大谷貞彦、奥隆夫、齋藤哲生、中村忠志、西ケ谷浩正、沼野芳夫、林経一、吉田実彦、**昭43年卒**北村祐輔、木村將吾、斉藤進、永井孝一、藤村盛洋、

松本三枝子、蝋清正信、**昭44年卒**菊池慎一、権田憲吉、多賀谷健司、竹本琢磨、山崎道雄、**昭45年卒**五十嵐博、岩岡夏彦、遠藤雅史、大久保雄興、尾方良文、小野田喜信、慶野睦宏、桜井敬峰、佐渡晋一郎、島谷敏夫、関根和正、反町欽哉、高橋義烈、樽井欣也、根本英雄、長谷健司、福本敏明、船戸正重、古寺伊都博、**昭46年卒**阿竹久明、榎本明、上村輝夫、草野義輔、楠山道祥、黒巣建一、斉藤一正、坂本繁一、寿永一郎、辻野祐治、中里寿雄、**昭47年卒**上野忠、杉浦二郎太、須田和紀、田坂敏幸、中嶋寛、長島茂邦、松崎健、吉田円、**昭48年卒**小林敏雄、篠原邦江、長友三夫、藤岡明房、松村廣二、村山聖次、茂呂好和、若海明、**昭49年卒**城間隆、中川寛行、中村茂唯、藤原育雄、山田英治、**昭50年卒**上間隆、佐竹大隆、藤川恭一、宮脇豊、山口正、山田昌弘、**昭51年卒**久保田博志、高野靖、林泰樹、真木一志、森谷英之、**昭52年卒**相原武司、大野吉晴、緒方正弘、国谷俊昭、樋口一雄、山根浩二、**昭53年卒**飯澤宏之、飯高成美、井上憲一、大和田修、川崎徹也、小林新治、郷右近信幸、白石博己、鈴木忠雄、永瀬雅記、**昭54年卒**安藤文博、井上靖、遠藤仁、加納達信、櫻井茂、津田武寛、中村正宏、野谷正志、古屋賢二、松本幹春、三田村耕太郎、**昭55年卒**青木治夫、飯田永介、池田洋、石垣純、石垣むつみ、磯村和幸、板垣太栄三、伊藤晃、大串純弘、小沢進、土岐和彦、濱田浩、深見吉彦、福井一男、三浦俊哉、渡辺幸太郎、**昭56年卒**天沼敏朗、奥井雅士、澤田孝春、杉山厚子、野口和弘、山本俊郎、**昭57年卒**栗田佳敬、河野浩司、清水久雄、渡邊朝一、**昭58年卒**荒木一郎、牛尼みゆき、大橋秀夫、鹿野裕毅、新名範久、関根雄二郎、辻将道、松本富夫、**昭59年卒**池田義信、今井和子、荻野一郎、熊木藤彦、小林雅彦、近藤俊浩、武田純一、鶴巻由美、西澤光男、野村正弘、安井亮一、**昭60年卒**岩崎とも、須藤喜之、藤邦弘、細谷徹明、**昭61年卒**青木憲司、荒井正巳、風間猛司、千葉健、永嶋彰、**昭62年卒**浅野健志、大和田哲也、加藤尚也、清水正文、鈴木健一、富谷秀明、平出健一、松倉千枝子、宮應誠、**昭63年卒**市川浩也、稲葉一巳、齋藤栄一郎、佐藤庸一、高城卓也、瀧口健、竹井勤、田野薫、遠山勉、中澤基行、中島健二、中村城徳、名取宏明、**平元年卒**亀澤盛行、下村淳、田中希世子、樋口直和、増田正之、三木正則、山岸みどり、**平2年卒**高口信彦、山田麻子、横銭守、**平3年卒**川上滋弘、小林謙史、飛田茂、中村和美、橋本和仁、藤田裕美、**平4年卒**岩田顕治、木岡士、矢澤由雅、**平5年卒**安藤英樹、國分悦子、佐藤修一郎、新富達也、吉田幸治、**平6年卒**安藤隆行、今田健一郎、中野辰也、永松由紀子、**平7年卒**亀井昭典、矢作哲、**平8年卒**淺野快二、小口雄司、高野哲也、西田敬、村沢佳文、村手依子、森薗希代、**平9年卒**上西正晃、薄裕幸、大川紀一、小川正治、恩田恵幸、鹿島秀紀、武田渉、中山美和子、三浦孝造、山崎純、和南城貴子、**平10年卒**赤熊繁、浅見浩二、荒屋雄一、泉正樹、入江和彦、小川秀夫、金井崇晃、土橋正和、松下朋弘、村田修、諸橋秀之、**平11年卒**浅野崇、伊藤誠一郎、井上光明、植田惠介、江原峰生、大川裕之、大塚忠男、兼平聖也、川上武範、神田一史、国府田明子、小松雅史、小山和人、西條喜之、志村純、高久直毅、竹内一浩、森田麗子、矢富由貴、吉野敬子、渡辺孝子、**平12年卒**河野邊力、清水健、鈴木健太、鈴木四季、関本晃洋、出口雅史、土井大樹、中込朝一、中村布美江、保井久理子、山口眞由美、山田康典、吉羽將則、渡部廣子

大学院

平7年卒千葉隆俊、**平9年卒**沖館俊典、**平10年卒**小島達矢、**平11年卒**髙橋靖夫、平野方紹、渡辺美久、**平12年卒**具島純一、樽見秀男、藤井憲男、松井育子、茂木元晴

経和会この1年

平成11年度定期総会

ミスター円　榊原英資氏が講演

平成11年度経和会定期総会は7月14日、例年通り新宿のセンチュリーハイアットホテルで開催された。

今回の目玉は何といっても〝ミスター円〟こと前大蔵財務官榊原英資氏の講演であった。講演依頼をしたのはまだ大蔵財務官現役の時で、埼大講師で金融監督庁課長の武部氏を通じお願いしたところ、快く引受けて下さった。榊原氏ご自身埼玉大大学院の講師だったことがあるので親近感をもっておられたのかも知れない。そうした縁でもなければ一同窓会がお招きできるような人物ではない。何しろアメリカのグリーンスパン、ルービン、サマーズといった猛者と五分にわたり合える国際人、世界中にその名を知られた「ミスター円」なのだから。ちょうど大蔵財務官を退官することが決った直後という立場であったが、通貨をめぐる国際的なかけ引きの裏話などを混じえながら、解り易く話してくれた。

演題は「市場原理主義の終焉」。

この日は経済学部現役の学生諸君も多数聴講に来ており、〝インターネットの発達により、「サイバー資本主義」とでもいうべき新しい経済の形が生まれており、これはもう金融というより情報産業である〟といった国際エコノミストの話に熱心に聴き入っていた。

一時間余りの講演のあと、お忙がしい日程の中にもかかわらず経和会員からの質問にも丁寧に答えて下さり、大変有益な記念講演であった。

このあと恒例の懇親会に入り、現役の学生諸君を含めた幅広い年代層の会員達が時を忘れて懇談し、予定の9時にお開きとなった。

就職セミナーを支援

昨年から経済学部の経済学会と共催で実施している就職セミナー「今年の就職戦線を考える」に今年もパネラーとして参加するとともに懇親会の費用を支援した。

今年は県内の優良企業㈱中川製作所一色社長に基調講演をお願いし、経済学部からの要請により経和会両副会長がパネラーとして参加した。

就職冬の時代とあって経済学部学生の関心は高く、会場は満席の状態。中川製作所は家庭用ファックスやレジスターのロールペーパーなどに使われている感応紙ではダントツという知られざる超優良会社。そのドラマチックな成功物語りに学生達は熱心に耳を傾けていた。

懇親会では昨年のような他学部学生の関入もなく、和やかな雰囲気のうちにすすめられた。講義室では出なかった質問を先輩達にぶつける人の輪がいくつも出来て、伊藤会長はじめ先輩達は大忙がしであった。

平成11年度事業報告

（自 平成11年4月1日　至 平成11年3月31日）

- 5月27日　常務理会　総会準備
- 5月28日　経和会会報第2号　発行
- 6月1日　経済学部講演会『今年の就職戦線を考える』
  両副会長出席
- 6月11日　理事会
  平成10年度事業報告・会計報告
  平成11年度事業計画・予算　その他
- 7月14日　定期総会
  榊原英資前大蔵省財務官特別講演
- 9月25日　安井文庫開設記念行事（資料展示・シンポジウム）
  両副会長他出席
- 10月20日　開学50周年記念ゴルフコンペ実行委員会
- 11月8日　同　上　コンペ開催
  168名　参加
- 12月3日　第4回就職セミナー（学生部主催）
  中野副会長出席
- 1月25日　常務理事会
  開学50周年記念事業報告
  東京八重洲口「ステーションカレッジ」開設　その他
- 2月5日　『100年の森』テラス落成式
  内藤副会長出席
- 3月24日　卒業謝恩パーティ
  会長、両副会長出席

50周年記念事業協賛

ゴルフコンペを開催

経和会では数年前から、大学、地域、同窓会が交流できる場としてゴルフコンペの開催を検討していた。折しも開学50周年を迎えるにあたり記念事業に協賛して実現しようと、2年前から具体化の動きが始まった。大学の教職員のゴルフサークルにも呼びかけて共催とし、経和会の理事を中心に実行委員会を結成した。

学長杯を渡す兵藤学長

埼玉県内の名門コースを前提に物色した結果、常務理事酒寄氏のお世話でコースは東松山カントリークラブに決った。一番の心配はコースを貸切るための必要最低人数120名を集められるかどうかであった。

11月8日、結果は168名参加の大盛況。家族友人を含めた経和会員、大学の教官、事務職員はもとより、埼大通り商店会の皆さんがバスを貸切って参加してくれたのは有難かった。予報では雨だったお天気も見事に晴れて絶好のゴルフ日和であった。

プレイ終了後のパーティには学長杯のプレゼンターとして兵藤学長も出席、商店会から豪華商品の寄贈もあって表彰式は大いに盛り上った。実行委員として裏方を務めてくれた経和会理事をはじめ、ご協力いただいた皆さんに感謝の意を表したい。

キャンパスだより

「駅前大学院」スタート

――注目の東京ステーションカレッジ

埼玉大の大学院経済科学研究科がJR東京駅の八重洲北口近くに開設した社会人向のサテライト教室「東京ステーションカレッジ」が各界からの注目のうちにスタート、5月8日にお披露目のセレモニーが行なわれた。

埼玉大学では本年4月に「大宮ソニックシティカレッジ」を開設し、教育学部教育相談室と地域共同研究技術センターを県内のサテライトカレッジとしてスタートさせている。しかし国立大学が県外に常設のサテライト教室を社会人の大学院生のために開設するのは画期的なことで、入学希望が殺到し、15名の定員に対し96人の応募があった。入学したのは全て社会人で東京・埼玉がそれぞれ6名、千葉2名、神奈川1名。授業は夜間18時から毎日開催されるが、教授陣には埼玉大経済学部教授のほか客員として大蔵・通産等のバリバリの現役官僚も講師をつとめる。講座内容は『国際ビジネスと金融』『ビジネス複雑適応戦略』を中心とした4つのプログラムで、数多い多彩な講義が用意されている。

勤め帰りのサラリーマンが夜間授業に通うにはまたとないロケーションで、東京駅八重洲口から地下街を通って直接教室へ入れる。

公開講座を開くにも至便だし、埼玉大の〝開かれた東京の窓口〟としても極めて高い価値がある。

5月8日のお披露目では日本経済研究センターの香西　泰会長の記念講演のあと祝賀会があり、埼玉県副知事、文部、大蔵、通産の各省から次官・審議官がかけつけ、ステーションカレッジへの熱い期待を語っていた。マスコミの関心も高く、5月16日、NHK朝7時のニュース全国版で大きくとりあげられた。期待通りの成果が得られるよう経和会としても支援していきたい。

浦高生が埼大で聴講

全国初の試み

国公立大学としては全国初の試みとして高校生を受け入れての公開講座が4月11日にスタートした。

大学の正規の講義を公立高校の単位として認めるしくみで、浦和高校の申し入れを埼大が受け入れ、文部省の了承を得て実現したもの。

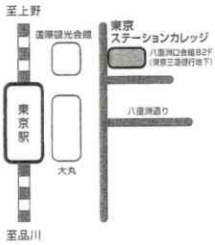
公開講座は前期17講座、後期10講座、通年2講座で、5学部の29講座が用意されている。

浦高生からの人気は上々で、前後期合わせて2・3年生延べ82名が聴講を申し込んだという。

全国初の試みということでマスコミの関心も強く、4月11日に行なわれた教育学部の第1回目の授業には新聞各社が取材に訪れた。

翌日の新聞には読売、毎日、埼玉、東京の各紙が大きくとり上げていた。初めて大学の授業を体験した浦高生達は「教科書のない大人の授業」にカルチャーショックを受け、一方机を並べた大学生達にとっては「高校生には負けられないぞ」という良い刺激になったようだ。

今後の少子化社会や大学の独立行政法人化など、大学改革のうねりの中でこうした新しい試みが着実に成果を生むことを期待したい。



経和会からのお知らせ

平成12年度　定期総会案内

1　日　時　平成12年7月12日(水)
　　18：00～19：00
　　総会／講演　経済学部　西山　賢一教授
　　19：00～21：00　懇親会
2　場　所　センチュリーハイアットホテル
　　B1　クリスタル　ルーム
　　（JR新宿駅西口、歩8分、都庁斜め前）
　　TEL　03―3349―0111
　　※地上　小田急ハルク前より送迎シャトルバスがあります。
3　会　費　10,000円
4　出　欠　6月25日までに同封ハガキにて必ずご回答ください

経和会ゴルフコンペのご案内

1　日　時　平成12年11月13日(月)
　　8：00　集合　時間厳守
　　8：30　スタート
2　場　所　季美の森ゴルフ倶楽部
　　千葉県山武郡大網白里町季美の森南2―49
　　TEL　0475―73―3242
　　※高速千葉・東金道路　山田インターから5分
3　プレー料金　16,000円（各自精算）
　　（プレー代、カートフィー、昼食代、昼食時ワンドリンク、パーティー費、の合計）―消費税別―
4　参加費（賞品代）　3,000円

注1　当コースはS53年卒　塙　洋次氏が支配人のフラットで距離のある本格的なコースです。料金は支配人の配慮により格安になっています。
注2　参加希望者は同封のハガキ（総会出欠用）によりエントリーしてください（後日　詳細を連絡します）
※同期会やゼミ仲間のコンペ、あるいは学外の人を誘うなど、多数のご参加をお待ちしております。

同期会紹介 ③

「うらわかい」はいまいずこ

昭和五十三年度卒業　中村直行

過去最高の海外旅行者数のニュースが流れる大型連休中の一日、この時とばかり書棚を整理した。大学関係のアルバムの横に黄色い冊子があったので引っ張り出してみると、「うらわかい」と筆書きされた表紙の右下にNO2埼玉大学経済学部阿部ゼミナールとあった。30頁弱のこの冊子の中には、阿部ゼミ卒業生の近況を知らせる記述やエッセイが中心にまとめられ巻末には卒業生名簿が添えられている。阿部昭夫先生のゼミナリステンの会報誌である。定かな記憶とは言えないが、一九七五年に会が発足され不定期に会報誌も発行された。「うらわかい」は、うら若いと浦和会を掛けたと先輩から伝えられたのをうっすらと想い出す。

「旧友の動向を知ったり、後輩が先輩を知って刺戟を受けたり、同じゼミで共通の経験をもつ者同士を結ぶ太い絆の役割を果たしている」(阿部昭夫先生記) この会報誌の第二号に私の拙文が掲載されていた。22年前のことである。実に恥ずかしいやら照れくさいやら。敢えて要約すると以下の通りである。

「経済学部はようやく1／10世紀を迎えたばかりで、良きにつけ、悪しきにつけ、これから伝統が蓄積されていく。おとなしい人柄の人が多いが、誰かが何かを言い出したりやり出したりするとそれなりの反応は必ず出てくる。同窓会の発足を要望する声も多い。いきなり大がかりな組織を形成するのは大変なので、学友・ゼミ・クラブ単位の輪を広げたらどうだろうか。埼経ファミリーを夢見るのは私一人ではないと思う。」

ずい分と生意気な事を平気で書いた図々しさにうら若さを感じるが、言いたい事は昔も今もそれ程変わっていない。

残念ながら、阿部昭夫先生は一九九六年五月十一日に帰らぬ人となった。寂しい限りだが、「うらわかい」のその後が気になってきた。今年のゴールデンウィークは、ゆっくりと想い出旅行を満喫できた。

わが青春の蒼玄寮
「櫟(くぬぎ)の木は残った」

昭和三七年卒　島野光男

JR北浦和駅西口を出て二百メートルほど歩くと、浦所街道の北側にふれあい会館と常盤公民館が並んでいる。この建物の裏に駐車場があり、そこには大きな櫟の木が数本立っている。この木は埼玉大学の旧キャンパスにあった数少ない名残の木ではないかと思う。当時このあたりは文理学部グランドの北の外れにあって、雑草の生えた荒れ地であった。我々は昭和三五年に硬式テニス部を結成して、この木の脇にはじめてコートを造った。炎天下で草を刈り、地面をならして土を運び、重いローラーで平らにするのに汗を流した場所である。

そして今、私はこのコート跡地に建てられた公民館で、「シルバー協会」主催の高齢者を対象としたさまざまな催しものに出席している。窓越しにその木を眺めて、遠い青春時代に思いを馳せながら…。そして月日の流れの速いことを、ひしひしと実感しながら…。

昭和三七年卒といえば、六十年安保闘争の洗礼を受けた年代である。世はまさに池田首相の提唱する「所得倍増計画」がはじまった高度経済成長時代の黎明期である。そんな中で駅弁大学といわれた地方大学も、整備の遅れを取り戻すために、さまざまな動きがあった。埼玉大学も地学の遠藤学長から原子物理学者で政治力もあった藤岡由夫学長にかわって、大学移転を基本とした遠大な構想が練られた。ニュース映画に倒壊を防ぐための「つっかえ棒」を映し出して「都心の近くにありながら、埼玉大学は雨風をしのぐ程度のみすぼらしい校舎で、一千六百人あまりの学生が学んでいる」と報道された。こんなキャンペーンが効を奏してか、まもなく現在の広い敷地と建物を持つ埼玉大学が誕生したのである。

しかし当時の埼大生なかんずく蒼玄寮生の大半は、そんな時代の流れにも超然とした貧乏学生集団であった。国の存亡にも関わる（と思っていた）安保闘争の集会より、一日の食費十円値上げの方が切実な問題であったのである。このための寮生大会は、なんと食堂が満員になるほどの集まりで、延々と徹夜の議論を戦わせたものである。

一方当時の蒼玄寮はとても衛生的であったとは言い難い。寮に入ったばかりの時に、夜小便をしようとトイレに行くと、蛆虫が多くて足の踏み場がない。一人前の寮生になるには、この足の置き所から、覚えていかなければならない。また四年の時であったか十五畳の畳部屋に入ったことがある。勿論当時は各人の仕切などはない。すべてが共同生活である。スリッパも共有であるから、一人が水虫にかかると、間違いなく同室全員に感染する。水虫だけならよいが、閉口したのはそのうちに全員が「インキン」にかかった時である。薬局で買ってきた薬をつけるが、これがとてつもなくしみる薬なのである。

皆で「イテー！　イテー！」とわめきながら、うちわで患部をあおぐ。われわれは先輩らしく「痛くなくては薬効はないのだ。もっと効果をあげるには、太陽の光にさらすことだ！」などと後輩に教え、大人になってからは、一度も「おてんとうさま」を拝んだことのないであろう男性のシンボルを、日光消毒するのである。フーフー息を吹きかけながら、太陽にさらしている姿は、今思い出しても赤面のいたりである。ちなみにこの病を「頑癬といい、思春期から二十代の男性に多くみられる皮膚病で、俗称水虫、インキン田虫のこと」とある。まさに青春時代の象徴であったのである。

こんな破天荒な寮生にも、感心なことが二つある。それは試験前のノート貸し借り時間の厳守と、火の用心である。あの木造の粗末な建物に、一度の火災もなかったことは、一見だらしない生活をおくっている寮生にしては、不思議なことというべきか？これは暗黙のうちに、火の元に細心の注意が払われていたことであろう。それとも動物的自己防衛本能が働いていたのか？

豪放磊落な寮生活も、その後個々人が自分のスペースをカーテンで仕切って、ひたすらプライバシーを守る時代になっていったことは、遺憾なことである。

編集後記

◎母校が50才になった。旧帝大は別としてほとんどの国公立大が同い年だからあちこちで〝50周年記念行事〟が実施されたはずである。この会報もやや50周年記念特集号の色彩を帯びてしまった。

◎しかしこれを機に母校を改めて見直すというのも意義あることだろう。その意味で学長の式辞を敢えて全文掲載することにした次第。

◎新・制大学も50年となると新しくはない。状況も大きく変っている。だから大学も変わらなくちゃ、と教育改革、大学改革が政治テーマになりつつある。だが〝御上〟による改革はどうせロクなことはないはず。

◎ならば自らが改革の努力をせねばならぬが、その点我らが母校は意欲的である。何かと制約の多い状況下で積極的に新しい試みに取り組んでいる。その一部を「キャンパスだより」の欄にとりあげておいた。

◎編集子が、多忙な中であまり時間をかけず、独断専行でやっているので何かとご批判も多いことと思う。是非ご意見を寄せられたい。